

東京大学史料編纂所編

## 『大日本古記録 碧山日録 上』

岩波書店 二〇一三・三刊

A5 一三八頁 九二〇〇円

寛正の大飢饉と応仁文明の乱といえ、室町時代のなかでは二大事件といふべき出来事である。京都東福寺の禅僧太極が筆録した『碧山日録』は、この二つの破局をはじめ、一五世紀中葉の政治・社会情勢や学問・語学・芸能・美術そして仏教の実像について生々しく綴っており、その史料的价值は各方面で見出されている。

これまでも本日録は、『改定史籍集覧』や『増補続史料大成』などに翻刻されて、研究者に知られているが、先年、東京大学史料編纂所から装いを新たに再び刊行された。本書については、『東京大学史料編纂所報』四八号のなかに、編纂を担当した榎原雅治・保立道久・前川祐一郎の三氏による詳しい解説がある。そこでも主張されているように、従来の翻刻では、いずれも古写本である前田育徳会尊経閣文庫蔵本を底本としていない点に課題が残っていた。今回の翻刻刊行で、初めてこの尊経閣本によって原本校正されたことは喜ばしい。加えて、本文の内容を摘記した頭注や、人名・地名・塔頭名を比定する傍注が充実したことも特記される。さりげない注記・校訂は決して容易な仕事ではない。実直な考証を重ねてきた校訂者の努力を思量する。

なお、十年以上前に、本日録の輪読会が開催されていたとき（清水克行『室町社会の騷擾と秩序』吉川弘文館、二〇〇四年、一九四頁）。本書の編纂者三氏のうち、榎原・前川の両氏が輪読会メンバーに加わっていたことからしてみれば、本書の刊行には長年の輪読が実を結んだ側面も認められよう。

この時代の僧侶の記録が、寺院の実態だけでなく、むしろ当時の政治や社会について雄弁である例はまま見受けられる。本日録も例外ではなく、僧侶の日常だけでなく、室町幕府直臣の鞍智高春のように、寺院や僧侶に世俗社会の側からコミットする多彩な人物群像をも映し出してくれる。

また、本日録の大きな話題の一つでもある寛正の大飢饉の際、飢饉に悩む流民に対する太極の弁は一見同情的にきこえるが、他方では、河原に散乱していた流民の骸骨が後日大雨で悉く流されたことを、「皆曰、天為下土、洗穢惡」（寛正二年四月二四日条）と報じるなど、やはり彼らの冷淡さ、民衆に対するよそよそしさが見え隠れすることも否めない。この時代の仏教と社会の関わり合い方を、改めて考えさせられる。

それというのも、彼ら僧俗の日常談話や記録癖のおかげなのだ。が、とはいえ、晦渋な文体と隠語に彩られた本日録の読解は、誰しも簡単なことではない。本書に施された注記にただ甘えるだけではなく、今後もこれら諸史料の翻刻や読解という地道な作業が理解され、室町時代研究がさらに幅を広げ進展することを期待したい。

寛正四年以降の記事を収める下巻では、いよいよ「天下擾乱」

に突入する。続刊が待ち遠しいが、戦乱の様相とともに、その脇で展開している一条兼良や清原家の文化交流、ささいな記録にも目を向けられることをお勧めしたい。

(芳澤 元)